

会 議 記 録

高松市附属機関等の会議の公開及び委員の公募に関する指針の規定により、次のとおり会議記録を公表します。

会議名	第4回高松市創造都市推進懇談会（U40／3期）
開催日時	平成29年5月11日（木） 18時30分～21時10分
開催場所	高松市役所3階 32会議室
議 題	（1）高松市創造都市推進ビジョン（各論）の6つのプロジェクトについて （2）高松市創造都市推進懇談会の今後の事業展開について
公開の区分	<input checked="" type="checkbox"/> 公開 <input type="checkbox"/> 一部公開 <input type="checkbox"/> 非公開
上記理由	
出席委員	徳倉会長、副会長、河田委員、桑村委員、児島委員、 笹川委員、高島委員、谷委員、瑞田委員、西谷委員、 眞鍋委員、若宮委員
市職員	三浦、時高、住吉、末澤、永木、堤、田村、美濃、本条
事務局	土岐局長、佐藤参事、橋本部長、佐野補佐、溝渕補佐、松下
傍聴者	3人（定員5人）
担当課および連絡先	産業振興課 創造産業係 839-2411

審議経過及び審議結果

1 開会

【事務局】

皆さんこんばんは。お待たせいたしました。お時間となりましたので第4回高松市創造都市推進懇談会を始めさせていただきます。本日はご多忙のところお集まりいただきまして誠にありがとうございます。

本日は大美委員、田中司委員、田中祐委員、宮井委員、吉岡委員、渡邊委員の6名の委員がご欠席となります。

会を始めさせていただく前に、市の政策課から皆様にご案内事項がございます。

（政策課から告知）

- ・政策コンテストの開催について
- ・「たかまつ移住応援隊」の移住サポーターの登録について
- ・日本 BPW 連合会について

【事務局】

それでは只今から懇談会を始めさせていただきますが、その前にこの度の人事異動で産業振興課に異動になりました職員から皆様にご挨拶をさせていただきます。

（事務局から挨拶）

審議経過及び審議結果

【事務局】

それではこれより先の議事進行につきましては、会長にお願いしたいと思います。

【会長】

ありがとうございました。皆さんこんばんは。よろしく申し上げます。新年度初めての会になります。

会の前に、移住応援隊の移住サポーターついてですが私と副会長と他の委員も入っておりますので、ぜひ発信の強化に御協力いただけたらと思いますのでよろしく願いいたします。

今日やることですが、今年度三回の会議の中でいくつかのやるべきことがあります。最も大事とっていいのが、フェイスブック上でも若干やり取りさせていただいた6つの文言の改訂です。ここをしっかりと変えていき、今日改訂する道筋という改訂したい。かつ皆さんお手元の、印刷していただいているA3の紙で、昨年度まで91の事業をいくつか分類しました。できればこのチームリーダー、イニシアティブを取って進めていく人を決めたいと思っています。

おそらく一つ目の改訂は、相当に時間がかかると思われます。ある程度のところで目処がたたなそうになったところでは、方向性だけ決めて、正副でお預かりしてまた皆さんに提示するという方式で。あんまり望ましくはないんですけども、最終、時間がなければそういう風な方式をとりたいと思っている。ぜひ皆さんの意見を出していただきたい。第一回に言いましたけども、例えば私がAという解答を出したときに、会長Aはありえないとなったときに、A'とかBとか違う対案を出していく。ただのアイデアキラミみたいな発言ではなくて、何かしらの提案に対してそれはこう思うという対案なり、違う御意見なんかを付け加えていただけてやっていかないと時間が足りなくなる。できるだけブラッシュアップをしながら進めていきたいと思っています。

みなさんフェイスブックは見ましたか？委員からも投稿していただいたり、今日、副会長がいくつか上げていただけてますけども、基本的に、この文言は変えましょうというのは、ある程度皆さんの中でコンセンサスが取れてると思います。取れてると思うので、変える前提でお話を進めさせていただきたいと思います。

【副会長】

フェイスブックの方で共有しているのが、6つの項目のビジョンだったと思います。海園・田園とつながる人間都市プロジェクト、フード・イノベーション・プロジェクト、グローバルな生活工芸プロジェクト、ワールド&ローカル・フェスティバル・プロジェクト、コンベンション誘致プロジェクト、クリエイティブ・チルドレン・プロジェクト。

まず最初にやったのは横文字があまりにも多いのでまず日本語に変えたいと思っていて、私なりに翻訳して日本語に変えてみました。もう一つ大きな改訂で7と8を追加しています。交流文化振興事業は、パラ陸上競技大会がメインで出てくる交流事業と、委員にも関わってくる移住暮らし応援隊の話もあるので、移住や仕事の話が一切この中に出てこないのは、割と違和感を僕個人は感じたので追加してみました。とりあえずこの8つを今一つの案として提案します。

【会長】

ありがとうございます。何もないところで組み立てるのは難しいので、今、副会長に出していただきました。あと皆さんのお手元にベースはあると思いますが、交流空間から子どもまで6つの中で、どういう風に表現をしていくのか、というところをぜひ皆さんのそれぞれの専門分野もありますし、立ち位置とか関わり方もあると思うので、例えば工芸の部分だけの部分でこう思うとか移住だったらこの部分はこう思うというものを一度出してもらいたいなと思ってます。

ただ、この場を出してくださいっていても、30人ぐらいいるので出ないと思うがどうでしょうか。

【委員】

これは現在のプロジェクトに対して案を出すのか、副会長の案に対して案を出すのか？

【会長】

どちらでも。プロジェクトを変えるという意味決定はされているのでどちらでも。

【委員】

ここで変えるという流れにある中で、今回の副会長が提案していただいているものは基本的には良い方向になっているのでは。一つは横文字が多いということは前回の会議で共有されていましたが、一言で何をしているのかということが分かるのはすごく良い方向性だと思う。

私は移住とか仕事の話が一番得意な分野として話ができるのだろうと思っている。この会議に出られている皆さんの得意分野というものが、トピックで網羅されている状況というのは幅広く、かつ深くこの市の取組を包括的に見られることになってくるとも思うので、副会長の案の中で、項目が皆さんの得意分野をより幅広く深く網羅されていることは、議論も進みやすいと思いますし、良いことではないかと思う。

【会長】

ありがとうございます。副会長は6つのものを仮に8つで出していただいているんですけども、これはあくまで仮なので6つは6つでこだわる必要はないですし、8つじゃなくて10だというのもあります。答えはないわけです。

まずは前回のおさらいをすると、基本的に、書いてはいるけど何を書いているか分からない文言は変えたほうが良い、というのは全員共通していることです。ですのでグローバルな生活工芸プロジェクトというグローバルという言葉がどこまで一般化しているのか、ワールド&ローカル・フェスティバル・プロジェクトというのは何が言いたいのかとかいうのがちょっと分からない。ということで、副会長のほうでこういう風にいったん書き換えていただいて、プラスこの7とか8とかっていうのはかつてこの6つ挙げてきたときから社会の状況が変わってきているので、この部分は柱として入れたほうが高松市はいいんじゃないか、ということで入れていただいております。

実はいったん副会長から見せていただいて、僕の意見なんかを入れさせていただいている部分なんかもあるんですけども、これでいいと言われたらこれでいいんですけども、いいことはないと思うんですよ。

例えば海外とかについて聞きたいんですけど、仕事上海外に接してらっしゃる仕事

からして、高松市が海外って言う一つの柱として外国人観光客とか国際会議誘致事業というのはいいのか？

【委員】

今、外国人のお客様、我々でしたら台湾のお客様に関したら四国・高松は日本一の宿泊数の伸びを見せる中で、じゃあなぜ外国人から選ばれているのかという観点の切り口から言うと、我々が気づかない我々が住んでいるがゆえに逆に高松の良さを気づかない、というところが必ずどこかにあるはずなんです。じゃあそれは、なにかスポーツ文化振興に繋がっていたり、例えば食につながっていたり、そのこのまちのひとに繋がっていたりする。

この外国人の観光客の視点を基に、もう一度高松市を見るという意味では、このテーマはインバウンドのお客様の視点を取り入れるって言うのは非常にいいんじゃないか。全てに繋がる。

あと国際会議に関しては、今月の末、日台観光サミットが今年はほんとにいいタイミングで、四国で高松を中心にある。そこには台湾から観光庁の長官級も大臣も来たり、日本の観光長官が来て、一大国際級のサミットで、そこで高松がどう見られているのかというのが我々としてはいいタイミングであるので、ここは非常にあのチャイナラインとしては注目したいし、我々の委員会としてもこの会議で話されることの内容が何らかのヒントになると思う。

私の立場からすると、海外というのは全てにつながっていて、一つ重点的に考えていければなと思っています。

【会長】

もう付け足すものはないですか？これは他の皆さんでもいいですけども。

【委員】（※1）

あとは海外から来られているお客さんたちからどう見られているのかということ、高松市ないし香川県から海外に発信できること、例えばフルーツだったり、農産物とかだったりですね。逆の発想で外になにを我々が訴えられるのかというところ。インバウンドというのは、どう外から見られているか、来る人にとって我々がどう提供するかって言うすごい内側からの発想なので、今度内側から我々が外にイチゴを送る、香川県の野菜を送るところで我々の一つのポイントとなるものだったり、イチゴ農家が発展していく一つの過程になる。というところで、逆にインバウンドが注目されているその反対で我々が何を彼らに発信していけるか、ていうのも双方の視点で考えるのに外国人観光客の方がいいのかな。外に発信していくという点では。

【会長】

他はどうですか？

【委員】

国際会議ははずしていいんじゃないかな。国際会議がいらないんじゃないかなという話ではないんですけど、今話をしているのは創造都市の枠組みの中にいるのかいないのかという話で。これは総論のほうに書いてあるんですけど、「創造都市とはなにか」というところで、「市民による、新たな活動が発生している都市」とか「市民

一人一人が創造的に働き、暮らし、活動できる都市」というので、キーワードは市民だと思っんですよね。

創造都市が始まって実際に取り組まれた事業、そのうち5番の「国際会議」の中に組み込まれていた事業として何が入っていたかという日仏国際会議、国内外の誘客促進、アートシティ高松、ミラノ万博、G7、障がい者スポーツ、フリーWi-fi。で実際この事業の中でズバリ「国際会議」だと思っるのは日仏会議とG7だけだと思っんですよね。日仏会議とG7が創造都市の市民云々のところにどこまで関わりがあるのかと考えたときに、そんなじゃないんじゃないかなあ。これは市民というところから行けば、日仏会議・G7というところは創造都市で取り組みべきところではないんじゃないかなあ。

それで、フリーWi-fiとか障がい者スポーツというのは枠組みとしては国際会議の中に入ってましたけども、副会長の枠組みで行けば障がい者スポーツというのは「スポーツ」の中に入りますし、フリーWi-fiというのは「海外」の中に組み込むことができますので、今回の中では「海外」というのはあっても国際会議誘致というのは外していいんじゃないかなあという風に思っます。

【会長】

ありがとうございます。意図せず予定調和でもなく、良いという意見とノーという意見が出ていただいてすごく嬉しいですけども、実は私あえてこの「海外」というのは先に言っただす。

なぜかという私の意見は、先程の意見に近くてこの冊子の中で主体が誰かといったときに、市民なんですよ。国際会議を誘致するのは市民じゃないんですよ。国際会議が決まった後にマインドとして、例えばおもてなしをするとか、何かしら協力をするとかボランティアを行うってのは市民だと思って、そこは市と協調関係だとか色々な自治体と協力して迎えましようというの市民の一つの活動だと思っ。G7が市民とどう影響するかというかと、一高松市民として何が反映するかという、当日通行止めになって全然動けないという心理。極端な話ですけどね。なので市民がどれだけ関われるかってなったときに、海外のお客さん呼んでそこに対してアプローチしていく市が協力していくのと、国際会議となっているのは、手が届くものと全く届かないものが並列で置かれているというのは読んで違和感があるんですよ。

なので、誰が主体なのかって言うのを今期3期のメンバーで作るときに、さっきの横文字ばかりのときは、誰が主体化って分かりづらかったんですけど、全部日本語に直していくとこれ誰が関わるの？誰が責任もってやっっていくの？つまり極端な話、国際会議の誘致って言うのは、香川県や高松市が自治体がメインとなっ国がメインとなっやっていかないと物事が進まないレベルのもの。割とそういっマインドで作るほうがU40っぽいかって思っます。

もう一回戻しますと。国際会議を抜いたときに何か別なもの、市民としてのマインドで別なもので入れたほうが良いワードというか、その柱があったら欲しいなと思っんですよ。外国人観光客とかね。外国に向けての発信だけだと高松市っぽくないなと思っんです。

僕が副会長が作っくれたもので一番好きなのは、海園・田園都市を表す海と山があるっていうのを最初に持ってきている。これの良い所が、海っていうのがわりとおざなりにされていたので、そこを出ってくれていたのは副会長が香川出身ではないので逆にそれを感じてくれたのかも知れない。そういう意味ではその海外というところ

のとりにあらず、その外国人観光客とかがいいもので発信とかを入れても、もうピンと来ないなあと。国際会議の唯一良い所は、何をすべきなのかがはっきりとするとところなんですけど。

【委員】

ぱっと聞いて海外というので、インバウンドというのが取り沙汰されてそれが国際会議ということになるとかなりピンポイントで抑えていっている感じがするので、そのテーマをやめるのであれば、外国人・観光客・誘致とか発信事業っていうので答えるというのが分かりやすいのかなと。その中の一つの項目で国際会議・誘致とかはいつているのはいいのかなあと思われます。

【会長】

ありがとうございます。事務局の方、発言があればどうぞ。

【事務局】

失礼します。国際会議が必要ないとの御意見がありましたが、先に配布資料の資料1の説明をさせていただきますと、各プロジェクトに組み込まれている事業について列挙させていただいております。これに関連して申しあげさせていただきますと、MICEの誘致というのが創造都市推進局の事業として取り組んでいるものであります。国際会議という項目を外してしまうと、MICE誘致という事業がプロジェクトの枠から取りこぼされてしまうという懸念があります。

【会長】

逆に言うと、海外という枠は外さないで、その中でMICEを包括できるようなストーリー性があれば問題はないということか？

【事務局】

それならば問題ありません。

【副会長】

先程の指摘はMICE誘致それ自体を外すという話ではなく、単純に文言の一番表の部分を変えた上で、MICE誘致も包括したネーミングにしたらという提案です。ここで国際会議が一番上に出ると、市民側から違和感が出るというもの。だからMICEのことも意識しながらネーミングを考えていけたらいい。別の委員（※1）がおっしゃるように発信する意識と逆に受け入れる意識との両方とも意識した言葉を入れるといいかも。外国人観光客と誘致と海外発信事業と上手く両方が入るものが。

例えば外国人観光客、おもてなしと海外発信事業など。

【市職員U40】

今、海外と国際会議誘致の件で話が出ているが、今の計画で挙がっている事業で誘致のものは全部終了している。これから何が大切なのかというところで、私が思うのは、誘致ではなく来た人をリピーターとして獲得していくこと。受け入れ環境の整備のほうが重要になってくるのでは。高松があるということは大分発信できていると思う。それはそれで継続していかなくてはいけないが、来た人がどれだけ満足して帰っ

てくれるか。もう一回来てくれる環境を作っていないと、一回来たからもう来なくていいやとなってしまう。Wi-fi の整備もしているし、そういう受け入れ環境のほうに力を入れる内容としていくよう、次期は改革していったほうがいいのではと私は思います。今、外国人誘致しても、市民自体外国人に慣れてないと思うんです。私は話しかけられたらどうしようと思います。英語しゃべれないし。そういうところ、外国人が普通にいることに、市民が慣れる環境を、国際とか海外とかの中で力を入れていったらいいのかなと思います。

【委員】

いいでしょうか。受け入れというのはリピーターをつけるという点で非常に大事で、ネガティブな意見になるが、四国に来られてるインバウンドの方は非常に増えているが、台湾に関していうと、皆さん高松であったり、松山であったり、高知にしても、残念ながら正直どこがどこだか分かってない人が多い。四国に来ているイメージが彼らは多い。幸いにも香川県を中心として四国が次のリピーターとしては魅力ではあるが、たまたま高松空港に路線があるから皆さん来ている。彼らにとってうどんが何県にある、道後温泉が何県にある、あまり関係ない。彼らの中には四国に来ている意識がある。高松を彼らに認識してもらうために、高松らしさを彼らに理解してもらう意味がある。彼らにとって高松に泊まってもおそらく覚えてない。そういう意味で、受け入れている我々が、彼らに高松に来ていることを認識してもらって、泊まってもらうということが今後に繋がる。高松を分かってもらうということを、我々がやらなければならない。

【委員】

受け入れる環境という部分で。私は農業をしているが、外国人実習生を受け入れるようになると、旅行だけでなく長い期間居るようになる。彼らはフェイスブックをしているんですよ。彼らを通して高松っていうところがどういうところかっていうのはお国に伝わると思うんです。なので彼らが居ても近所の人温かく接してくれたりするほうが、すごくいいところだなっていうイメージが伝わるのかなと思います。観光客だけでなく、今、現時点で住んでいる外国人が発信する情報のほうが圧倒的に量が多いと思うので。

【会長】

いったんまとめると、国内外の交流人口を増やしたいんですよね、今の感じだと。極論をすると、20年後も30年後も50年後も僕らの次の世代の人たちでも、高松市が高松市として残ってるような文言を作りたいなと思ってのわけです。それを考えると、移住とも絡んできますけど、日本の中から選ばれるとか国際化の中で世界の中から選ばれるとか。移住政策と一緒になんですけど、いきなり来てくれって言っても来ないですから、関わる人口を増やしながリピーターを増やして行ってそこに住んでもらう。

高松とか香川に関わりながら、交流していくリポートしていく琴線はどこにあるのか。このあたりを文言とするとしたらどういうフレーズがいいのか。市民の人に分かってもらうよう、ワンフレーズでキャッチーでページをめくれば詳しく書いてあるような。

【委員】

キャッチフレーズはすごく難しい。私自身何度も来て何度も関わっててキーワードは「ほどよい」。ほどよいコミュニティと程よい規模感のまちであって、ほどよい人との距離感。田舎に移住すると、家の前に野菜が置いてあって、隣の人が洗濯物を取り込んでくれた。そんなの香川にはないですけど。あんまり入り込まないほどよい距離感があってちょうどいい。県の大きさもちょうどよかったりするから。いろんな意味で「ほどよさ」はある。

スポーツの話をしてもいいでしょうか。副会長の案を印刷させていただいたが、国際会議のところは国際じゃないといけないのか。私はMICEの仕事をしていたことがあって、国際会議、国際コンベンション、展示会などをやらせていただいたときに、規模感の話で言ってしまうと、圧倒的にホテルが足りない。ハード面の厳しさだったり。

あと会長もおっしゃっていたように誘致は市民が関われないので、私がG7来て下さいといったところで絶対に来ない。県とか自治体の方とかになるとは思う。ただMICEの中のインセンティブというところはすごく可能性があると思う。なぜかというところ、インセンティブというのは例えば、企業の表彰式、仮に生命保険会社だとするとすごく成績が良かった人を表彰するために、成績良かった人を違うところに連れて行く。ハワイだとか沖縄に連れて行って、そこで表彰式を行って観光をする。そこはすごく可能性があるのかな。

観光地というか、御褒美のために連れて行ってあげたいと思う土地になることはすごく大事だと思う。だから観光の部分強くしていく。なぜ私たちがハワイに行きたいかというところ、南国の素敵な雰囲気ですごく素敵なんだけど、空港から「アロハ」と人懐っこい人たちが声をかけてくれて、楽しんでもか？と声をかけてくれて、迎えている気分になってすごくワクワクする。そういう部分でおもてなしするとすると、観光も受け入れの部分で大きくなると思うんです。

特に、MICEになると、呼んだら終わりじゃなくて、毎回そこで表彰式してくれるかというところ、展示会とかだったら何年も同じ会場ですることあるんですけど、ただそれも難しい。MICEもまた観光、来てくれた人がまた来たいと思わせなきゃいけない。

高松サポートトライアスロン大会をやっていると、3種目もやる元気な人たちは朝10時にスタートして昼前に終わるんですけど、女木島・小豆島に行きたいって行って来るんですよ。フェリーの時間分かりますか？って。そこを大会とかいろんなところでサポートしていくとファンが増えるかなと思います。

スポーツのところも副会長がおっしゃったように、文化・歴史のところはまとめたほうがいいんじゃないかと思っていて、スポーツと文化といったところでスポーツもいろんな方向性がある、今も、見る・する・支えるというのがあるので、高松というか、香川県にはサッカーチームであったりとか、アイスホッケーチームであったりとか、野球とか、これだけプロスポーツチームを持っているところは他にないので、そこで接してもらって、見るということだったり、するということは大会、支えるということ、ボランティアだったりとか、関わりを持っていくところがあるのでスポーツはぜひ入れてほしいと思います。以上です。

【会長】

ありがとうございます。観光って先程の委員がおっしゃっていただきましたけど

も、他の委員はどうでしょうか？この中に観光という要素は入ってますか？

【委員】

祝祭に入っていると思う。地元のイベントを見に来るだとか。あと国際会議も広い意味では観光が入ってくるかなと。高松のことを知らない方でも会議になれば高松に来られるわけで、そこで高松をPRすることは絶好のチャンスだと思う。

【会長】

副会長、この5番の「国際会議」を「海外」に変えてはだめでしょうか？さらに「観光」に変えてしまっては弱くなる？

【副会長】

海外だけでなく、東京や他の自治体に住む人も来るということでしたらいいと思う。

【会長】

「観光」とした場合弱くなる？

【委員】

少し広すぎると思う。もうちょっとなにかにフォーカスしたい。観光だと漠然としすぎ。

【委員】

実習生の受け入れが「観光」だと入らない。

【事務局】

現在の6つのプロジェクトの中で、さまざまな事業が実施されているが、「子ども」以外のプロジェクトには観光の要素が含まれている。

【会長】

それでいうと、現在の6つのプロジェクトはだいたい歯抜け。住みたい町を表現しているのか、関わってもらいたい町を表現しているのか、誰に評価されたい町なのか見えていないので、この議論もばらついてしまう。いったんちょっと整理します。

方向性として、市民の皆さんがこの文言を見たときに、自分たちが高松市を見たときに、高松市がこういう風なまちを目指してるんだというのを分かってもらう。入り口ですね。そこから色々お仕事してる人とかと関わっている中で、これにすごい興味があるとか、国際だとか、スポーツだとか、子どもだとかというところの中に移住だとか。自分たちに関わるものという風なイメージで。他はいかがでしょうか？

【委員】（※2）

やりたいことがいっぱいあるんだろうなと思うんですけど、作るのはビジョンですよ？だからあんまり細かいところに落とし込み過ぎると、一つ一つの活動が限定されるし、市民の活動も含めてこの中に含めていくのであれば、市が持ってるビジョンはもっとほんわかしてるというか、何でも受け入れてあげるよという度量の広さが

ほしいなと思う。国際会議だ、MICEだ、観光だっていうのは、ある意味で交流の中に入ってしまふ。子どもをもっとピックアップするならば、子どもと関わる事業って他の事業とも全部関わっているの。

大きな枠を6つも作らなくていいんじゃないかな。今は仮に4つとしますが、大きい枠をいくつか作ってあげて、それがどう繋がっていかってという絵的なビジョンを見せてあげるっていうのが、市民に伝わりやすいかなと思います。一つ一つの言葉を拾っていくと、すごく難しいし、これは入るのかこれは入らないのかって言うとあまり伝わらない気がします。

【会長】

今の内容はすごくいいと思います。そこでどういうまとめ方がいいかという、会社でもNPOでも世の中の組織って、集約していくと、だいたいこの3つになるんですよ。取捨選択していくと。

自分たちがやりたいこと、たとえば高松市民としてやりたいとか市としてやりたいとか。あとできることってあるじゃないですか。あとはやらなければならないこと。もちろん抱えてる問題をどう解決するかとか。伝統工業を再興していききたいとか。交流人口とか外国人観光客にリピートしてもらいたいとか。移住者を増やして素敵な町にしていきたいとか。

この3つのバランスを6つのプロジェクトに当てはめていって、足りないところの文言を付け足すというのがいいのかなと。そして僕らの目指す6つか8つか9つがこの中にあると。さらにいうとこの中で、それぞれのプロジェクトがあってそのリーダーを今日決めることができたらと思っている。なので、これが国際でも、子どもでも、伝統工芸でも、スポーツでも、というところのくくりの中で、極端な話、先程の話だと一つのキーワードでいいと思うんです。まちとか子どもとか。

この3つのここを突き詰めていく町を作るんですよっていうと、ふわっと受け入れができるかなと。図にすると、先程の意見のとおり、4つとか3つじゃないと分からないですね。高松市は3つの柱がありますという柱はいくらでも増えてしまう。他はどうでしょうか？

【委員】

私もこの6つのプロジェクトを見ていて、重なっているものがあるなあと感じました。整理整頓をしていくとほんとに単純な、子どもとか国際交流とかキーワードが浮き上がってくるのかなと。そういう分かりやすい言葉からアプローチをしていったほうが、市民レベルで見ると分かりやすいと思う。色々長いプロジェクトって書いている部分も、キーワードで整理していくといいのかなと思いました。

【会長】

瀬戸芸でいろんな人受け入れるでしょ？日本人受け入れれば、高齢者の方から幼い方から外国の方も受け入れるんじゃないですか。その時に彼らは何に満足して帰ってるんですかね？瀬戸芸に触れたいと思って来られてると思うんですけど、それ以上に何か得て帰られてる感じがするんですよ。言った人の話やレポート読んだりすると。

【委員】

人に触れることと、例えば食とか文化というところに満足して帰られる方が圧倒的に多いと思う。

【副会長】

個人的に7つさっき出したんですけど、あの順番じゃなくても分類はできるなど。ぱっと思ったのは、暮らしにより近い事業、人と自然にやさしいまちづくりとか、子どもとか、関係の暮らしにより近い事業、一方のより外向きの国際とかスポーツとか祝祭とか観光とかは外に向いてるのかな。その間に仕事とか食とか工芸とか。そういった分け方がさっきの7つはできるのかなと思った次第です。

【会長】

今の副会長の意見は市民からの距離感ですよ。市民が日常で暮らす生活レベルに近いとこだし、そこはかなり離れてるけど、高松市でやってることの色分けなのか距離感なのかを3つ作って、それを7つ当て込んでいって、最後そこに事業を紐付けていく。それでその事業は何のためにしているの、と言われたときにこういうことだと言われると分かりやすいし、それぞれ事業やる人も分かりやすいと思うんですよ。どういった表現がいいか。暮らし？

整理しますので考えながら聞いてください。柱が6つあったのが9つにしようという所から、こういう大きな流れの中を分類していくって流れに変わっています。この流れに違和感がありますか？

【市職員U40】

違和感は全くないと僕は思います。一市民としてそれを見たときに、近さが分かることはすごく良いことだと思っている。そこに高松らしさというか高松に流れる時間というか、住むには相当その場所を気に入らないと住むってならないと思う。この枠組み、暮らし・仕事・観光の中では暮らしの部分になってくると思うんですけど、暮らしの部分に関しては、高松らしさのワードを入れていければ、非常に分かりやすくなるのかなと思います。

【市職員U40】

違和感というか、今、話をしてる大枠の話って、そもそも今、ここで改訂しようとしてる部分は、僕らは各論の部分をしようとしてるんですよ。言ってみたらアウトプットの部分をしようとしてるのであって、その大きな部分の話というのは、総論の部分で出てきているところで、高松市の目指すべきまちの姿は総論の部分で示しています。その中で、構成が出ているものとして、3つの大きな将来像が総論の14ページにあって、「自然や歴史、生活と結びついた「芸術指数」が高いまち」、「交流で新たな発見がある「クリエイティブな暮らし」にあふれたまち」、「豊かな生活が実現できるコンパクトなまち」この3つを将来像として高松市は持って、それで創造性豊かな海園・田園都市を作っていくましよう、これが目指すべき姿ですよという話をしている中で、具体的に何なのかというところで各論だと思うんです。それを実現していくときにいくつかの目標というものがあって、目指すべき成果とは何ですかというところで、12ページから13ページの部分で、課題として創造的人材7つの指標というものがあって、それに対して最近の流行で言うところのKPIというところが繋がってきていると、人数がどうなったというのを数的に見ている。具体的にそれを

実現していくところで、短期的なところで何をしていくんですかって言うところで、各論の流れになっていると思うんです。逆に、この6つの柱の下に、じゃあ何がありますかっていうのをずっと市の取組として書いているので、ある程度幅があってもいいんですけど、戦術的にこれをやっていきたいと思いますという柱を示してあると。これが流れだと思っんです。先ほどの国際会議を海外だとか観光という言葉に変えようとするところなんですけども、その中で受け入れ態勢って言うところなんですけども、重要なのかなと思っっていて、国際会議を開きたいって言えば、開きたいんですけど、創造都市という雰囲気市内に与えるためには、2期の人がしたビジョンの事業評価のときに書いてたんですけど、サミット（G7香川・高松情報通信大臣会合）が開かれたことは良かったと言ってるんです。それは開かれたということが市民にとって誇りになっている。自分は関係ないけれども、国際会議が開かれる場所に自分は住んでいるという意味において創造都市という雰囲気を醸成しているわけなんで、それを開くことに意味はある。ただそれを開いたからどうこうじゃなくて、それをどう広げたいまで書いてあるので、そのこの意味で言うと国際会議は受け入れ態勢に変わったらいいし、観光となっってしまったら観光が創造とどう繋がっていくんだという話になるんであれば、海外とかのフレーズのほうがピンと来るのかなって。

【会長】

皆さん、今日、総論はお持ちでしょうか。5ページに第5次高松市総合計画というのがあるんです。コアのところ、創造的アプローチ、世界指向・独創指向・未来指向。その中に創造的アプローチが伝統芸能・工芸・文化交流・スポーツをどんどん施策的に広げていって「魅力にあふれ、活力のある創造都市」さらに「創造性豊かな海園・田園・人間都市の実現」に。ここの表現の中で、色々やりたい事業があるので紐付けていったときに6つの柱を立てたということだと思っ。

この冊子って割とやらなければならないこと目線だけなんですよ。示したらきつとあるんですよ、高松市ができることってというのが。その一つがG7誘致っていうのができることの中で最高峰かもしれないですけど、それができたということがシビックプライドにつながっていくっていうのがあると思っんですけど、それをもうちょっとバランスよく入れて表現できれば一番いいなと。

【市職員U40】（※3）

私が考えてきた案は、先程の委員（※2）に近くて、私の中では『豊かな暮らし』と『こども』と『世界に向けた発信』を柱にしたいと考えた。『世界に向けた発信』は国内外の交流人口を増やすという内容。この3点で、シビックプライドの醸成と、外の人に向かって何を発信したいかという内容を盛り込みたい。

暮らしの中で、高松に住んでいる人の地元愛を高めていきたいと高松市は思っっているんですよっていうのを書きたい。『豊かな暮らし』の中にさっきの文化芸術とか、スポーツとか、全部入っちゃうんですけど、大きすぎてそれはそれで、分けだすとすごい分かれちゃうので、分けないほうがいいかなと。子どもだけは推したいので特出しで。住んでる人に向けては「暮らし」と「子ども」。それ以外の人に向けては「交流人口を増やす」って言うところでMICEとかインバウンドとか移住とかを盛り込めれば。

【会長】

あとどなたか意見を持ってこられた方はいらっしゃいますか。

【市職員U40】

意見ではなく私の疑問に感じる点ですが、子どもは全部にかかってくる。スポーツと子どもを分けるとか食と子どもを分けるとか、それは私は納得がいかない。食の教育もあり、スポーツの教育もあるし、外国人との交流も子どもに教育しないといけない。子どもの立ち位置をどうもっていったらいいか悩んでいたところで。外向きのところと中の住んでいる住民の人に対してという2つには分かれる。中に住んでいる子どもか大人に対して政策はあるのかなと。子どもは全てにかかってくるというのが私の印象。工芸とか食とかと分けにくい。

【会長】

一か月ぐらい前に、事務局と打合せをしたときに子どもの話もしたんです。子どもでこの色はないとか、上から優先順位を考えていくときに、子どもは6番目なのかとか。僕は子どもと関わる仕事が多いから言っている部分もあって、子どもがいないと市として成り立っていない部分があるのに、なぜ子どもがこんな茶色みたいな色。市長も推してるんですが、クリエイティブ・チルドレン・プロジェクトというのを広めていく中で、じゃあ子どもに関わる部分、芸術市の派遣とか一つ一つの事業は素晴らしいし、他の自治体がやってないことも当然やっている。

子どもって御意見いただいたときに子どもやったら大人もいるでしょって指摘もあるわけですよ。これだけがある意味異質。子どもを大事にしましょうというとな誰も反論できないですけど、それがゆえに分かりづらい。というと子どもというのは大事にするという大前提で組み立ててるんだよと、例えば交流空間もそうだし、食もそうだし外国との交流もそうだし、というところの表現の方がいいかなと。

この中に祝祭専門の人はいますか？私、これまでの人生の中で祝祭という言葉を使ったのはこの委員になって初めてなんですよ。

【委員】

祝祭というのは違和感がある。イベントのほうがまだすっきりする。ここはカタカナの方がいいのかな。

【市職員U40】

子どもとあわせるなら「遊び」は？

【市職員U40】

「祭」ではだめ？祭だとピアノコンクールとかはくっつけにくいかもしれないが祭と同じでは？

【会長】

ちなみに高松市として推したい祭はある？

【市職員U40】

推したいというか大々的にやっているのは夏の高松まつり。観光交流課の中では高

松まつりは春・夏・秋・冬と位置づけていて、春はフラワーフェスティバル、夏は花火の打ち上げをしたり、秋は仏生山の大名行列に付随したものの、冬は去年終わってしまったが冬のまつりがあります。四季折々の色々なまつりをやろうとしています。

【委員】

「祭」だと市や県が支援したがないのでは？文化という言葉がどれにも引っかかると思う。

【市職員U40】

この祝祭に入っているのは、地域のまつりとか伝統的なところを含めて入っている。それを守りたいということも含めて。それが郷土愛に繋がるというか自分の地域がどういう地域なのかなと、それを通じて知っていくことで自分の核ができていくという意識はあるのかなと。

文化という切り口は小さなものから大きなものまで、国際芸術祭だけをイメージしてるわけではなくて、小さい身近なものもどうするか、地域コミュニティをどうするかも含まれていると思っている。

【会長】

逆に言うと、交流空間に内包してもいいのかなと。

【市職員U40】

9つにするのか3つにするのか4つにするのかという話で言うと、今、出している4つの上2つは、暮らしにくつついた部分になっていると思うんです。今後、特出しするかは別にして、子どもっていう部分と、それぞれのもっと小さな部分は進んでいて、この小さな部分が最終的に各論で挙がってきている。各論を述べるにあたって大きな3つの柱にするんですよという言い方だったら、子どもという部分、交流都市という部分、それから暮らしという部分の中に細かな話があって、それが各論の部分で今から述べる部分ですよという話で、この各論が出来上がってくるという話であれば両立するのかなと。なので両方くっつけたらいいのではと、議論を聞いている感じでは思いました。

【会長】

「食」について言い足りないことはありますか？農業とか食とか。フード・イノベーション・プロジェクトを副会長に書き換えてもらったら「食と農の革新的事業」

【副会長】

農業も大事なので農を追加した。

【委員】

それは食と農のフェスタでもそれに関わるイベントをしてくれていうので体験をやったが素通りが多くてみんな気づいていない。呼び込みをしないと興味がある人は意外といたし、子どもにさせたいというお母様方もいたので、まずする場所とか情報が必要かなと。また香南町にアグリームっていうところがあって、幼稚園の子がサツマイモ取りに来たりだとか、去年はイモが足りないという風になって老人会のところ

まで行って掘ってたんです。意外とみんな土を触りたいのかなというところがあってその環境づくりがしたいなっていう風に思っていて、まあ小さいながらも周りにお子さんもいるのでそこから発信をしたいなと思っています。

【会長】

農業というか農でいえば、僕も3年前、埼玉東京から帰ってきて、高松って割と食と音楽のイベント、言い換えると大人のイベントが多いなと、そこに紐づいていくところで農業。お聞きしたいんですが、工芸運動と書いてくださったのが印象的なんですが、どのところを目指すというか販路拡大とか、まずはどこを目指すしながら拡げていきたいのかというイメージをお持ちなのかなと。

【委員】（※4）

私の場合、食と工芸は分けてないというのが結論です。工芸品に食を乗せないと工芸品が売れない時代ですし、漆器って海外に持って行くと、高いラッカー塗った器なんですよね。それをわざわざお金出して買ってくれるっていうのは、日本人としての文化があるから買ってくれるんであって、じゃあどうやったら分かるかっていうと、漆器って口につけてみないと分からない。だからそこに食という体験がないと工芸品にも繋がらない。だから漆器を売るときには必ず、日本食というよりは洋食を載せて売ってみたりとか、とにかく漆器に口をつけてもらうっていう作業をしています。私が「運動」としたのはそこで、工芸を売ればいいというよりは、工芸をつなげていく人材だったりとか、工芸というものが子どもとかに関わってきますよね。何かができるからゴールではなくて、じわじわと繋がって行って、みんながそういえば香川県でこういうのがあったよね、伝統工芸でこういうのがあったなあと、子どものときにそういえばそういう教育を受けたなあとか、漆のお椀でお汁飲んだなあとか、そういう幸せな体験が人に残っていくということ。何か大人が楽しそうにやっていたら、それは子どもにも海外の人にも伝わっていくのではないかと思い「運動」としました。

【委員】

結局は豊かな暮らしと子どもと全てが並ぶ感じ。我々が考えているのは3つの柱で、ただし大きな3つのところが重なるところを限られた時間と限られた人数で結果を残すとすれば、その重なった部分で結果を残すこと。重なった部分に先ほどの図を真ん中に置く。その緑の部分が結果的に我々が目指すところ。だからその交わったかつ、できることやれることっていうところが、そのプライオリティが高いいくつか、今までプロジェクトといわれていた各論になってくるのかな。

【会長】

ちょっとずつ洗練されてきましたね。他に意見のある方は？

【市職員U40】

私も祝祭は違和感があって、それがイベントでいいのかってなると言葉として分かりにくい。もう一つがフレーズとして一つだけ職業というか産業的なところが入ってきてるなとちょっと違和感があって。それは先程おっしゃった、見る人する人支える人といった言葉で言うなら、作る人でいいのかなと。工芸も作る人にできるし、農業も作る人かな。ただ大きな枠をさらに大きくしている不安がある。

【会長】

僕は違う違和感があって、農業があるのに海園・田園と言っているのに漁業がない。海のことを抜け落ちてるので、例えば、海の幸・山の幸みたいなイメージのものを盛り込んでいったらどうか。たまたまこの場に漁業関係の人がいないというだけだし、このフード・イノベーション・プロジェクトは土から出てきたものをイメージしてるのかなと。そこは違和感つながりで、先ほどの3つの案（※3）と別の委員（※4）から出していただいているものを上手く組み合わせられたら。

一つ、先程の意見（※4）に手を入れるとするなら、子どもってというのは全部に関わることなので、子どもだけに限定せず、市民みんながという形で動いていく、もしくは子どもってものをさらに先鋭化していくって方針があります。子どもだけが関わられる事業は一つもないので、そこには大人である専門家であったり、大人である保護者であったり、なにかしらの大人がいないと子どもは参画できない。子どもをもっと前面に出して行って、子どもがやることに大人が協力していく。言い方は他にあると思うが、子どもだけを独立させるならもっと独立させるか、もしくは消してしまつて、子どもというのは市民のうちの一入であるから、それは当たり前ですよっていうのを違うどっかで言うのはありかな。そうするとその3つの中でやりくりしていくフォーカスしていく、副会長のおっしゃられたフォーカスの仕方ですと多分ここに載っている事業は何一つ載れないし、新しくやっていく事業も内包していくし。高松市、何目指してるのって言われたときにまとめた話ができるっていう方が、話がしやすいのかなと思います。

あとはどなたか意見はありますか？

【市職員U40】

途中で副会長から暮らしと仕事と観光の外向きの話が出てて、暮らしも自分たちで楽しんで行って、外向きに自分たちも楽しむイベントだったり、海外とかそういったちょっとした贅沢の、生活工芸とか芸術とか、そういったものを楽しむのがあるかなと。

今、子どもっていうワードがすごい出てきてるんですけど、おっしゃっていたように子どもは全部に繋がると思うんです。全部に繋がるから大きな枠になっているから、子どもというワードがなくなるのはちょっとどうなのかなと思っている。残したいけど全部に繋がる、全部に繋がるから子どもというワードがあんまり表には出なくなるのはすっきりしない。

【市職員U40】

祭関連で子どもが楽しめているのはあるのかなと。小さいころはあんまり行かなかったんで、毎年行くようなものはあるのかなと思っていた。全部当てはまるようで全部当てはまってないのでは。

【会長】

子どもが祭にいかなくなったのは、娯楽の多様化が一因といわれています。

まとめますと、そもそも、子どもとして祝祭と国際会議は変えたいという方向になっています。その中で、子どもという位置づけをどうするか。全てに関わるから消すのか、やっぱり子どもは必要だという意見も出ている。

高松市は子育てしやすいまちということを前面に打ち出しています。子どもは全部に関わるけど、その中で「創造的子ども応援活動」なんかは言葉が上手いと思います。子どもを応援するのでなく、創造的なものをさらに応援する。高松らしい創造都市って何なのと聞かれたときに、芸術士を派遣してます、漆器で食べるプロジェクトを企画してるよとか、農業とか漁業に関わったりだとか、観光に関わったりだとか、そういうことが言えるかなと。

【市職員U40】

今の絵は「子ども」というのが6本の柱の中にいたものが、その1本が他の柱を含んだ状態なんですよ。子どもの枠が広まったんですよ。そういう位置づけで子どもを置いていくのが正解なのかなと思うんです。

会長が言われるように、高松市の創造都市は何なのと言われた時に、その3つのキーワードを言うことによって、どこを目指しているのか分かるときに、子どもっていうワードは結構使い勝手がいいので、外すのがいいのかなって。イメージがしやすい。ただイメージができないのがどの方向性に行っているのかが分からない。交流都市とか子どもとか生活なのか暮らしなのか、というところを大事にするまちなんだと、それが創造都市としての柱としてあるんですよ、という話で残せるんなら、子どもはイメージがしやすいので置いておいたほうがいいのかなと。

【会長】

「祝祭」を「祭」に変える。この後何が行われるかということ、これを作るとさらに上の会議にこれを変えましたっていうことを説明する作業があるんですよ。なのでここに音楽を入れる。皆さん他に入れたいワードってありますか。

【市職員U40】

今、観光が抱える問題というのが、人材育成ができてないというところで、観光に関わる人がどんどん高齢化して行って、その現状で、後継者を育成だとか伝承という単語を入れたい。今後の高松を担っていく人たちになると思うんで「伝承」という単語だったり、「後継」「育成」という単語で、観光も子どももスポーツも全部当てはまるものを入れることができるのではないかなと思う。

【会長】

否定するわけではないが、伝承という言葉は変えられないか。継ぐ人がいないから伝承とっている感じがする。「担い手」とかいいですね。「つなぐ」とか。また思いついたら言っていたきたい。

【市職員U40】

音楽はその位置でいいのか。音楽は「芸能」というイメージ。人によって音楽に対するバックグラウンドは異なるが個人的には「暮らし」に近くあって欲しい。

【会長】

音楽も含め祭も中心に入れたらいいのかもしれない。あと国際的要素も入れたい。インバウンドでもいいんですけど。インバウンドを違う言い方でできないですか？「交流都市高松」「交流」「MICE」が必要であれば「国際会議」のまま入るのも

ありかな。仕事はどこに入れましょうか？

【委員】

科目分けだと難しい。真ん中よりの「交流」と「工芸」の間とか、「子ども」と「交流」の間とかのエリアになってくると思う。

【委員】

真ん中に暮らしを入れたらいい。そこに仕事とか継承とか事業継承とかに近い単語。

【会長】

そしたら4つの真ん中に仮に「豊かな暮らし」と定義して、この中に入るものもある。普段の生活の面だとか、仕事の面だとか、もしかしたらその中に移住も入ってくるのかな、すまいとか。

あともう一つストーリー性を強めるために、4とか5とか高松らしい数字ってないのかなとずっと考えてるんです。高松市らしい数字とか高松市らしい色とか。意味を持たせたい。なぜこの数字なのか。なぜこの色なのか。ストーリーがあるから人は覚える。四国なら4がある。

【市職員U40】

イメージ的に「交流都市」のような外向きのものは、海の幸とか瀬戸芸で島をアピールすることが多いので青がいいのかなと思う。

【会長】

じゃあ「島」を入れようかな。「船」入れなくていい？

【市職員U40】

「交通」どうか。それで「豊かな暮らし」の中に繋げる。住んでる人にも外から来る人にも。

【会長】

もし他に数字があれば言っていたきたい。

【副会長】

高松市が作られたのは明治23年。

【事務局】

明治23年に40番目の市です。

【副会長】

1890年2月15日にスタート。

【会長】

いったん数字は置いて色に行きましょう。「子ども」は緑でいいかなと思います。成長を意味するなら。工芸とか芸を表す色は何かありますか。「食」って言われたら何がありますか。

【委員】

血肉をふと思ったので、ピンクとか赤とか。

【市職員U40】

今これは4つに分ける前提で話が進んでいますか？「工芸運動」が特出しされている感じがする。一分野では駄目なのかなと。アートとか音楽とかと音楽とかと同じ位置づけでは駄目なのか。大きな枠を3つにしてどうなのか。暮らしの中に「食」も「工芸」入れてしまえばいいと思った。暮らしという分野を作ってやればいい。

【会長】

僕の主観では「豊かな暮らし」がいいと思う。Uターンで帰ってきて、一番何を感じたかという豊かさを感じた。暮らしだけじゃなく「豊かな暮らし」として、高松市ってどんなところ？と聞かれた時に「豊かな暮らしができること」と言いたい。極論すると、市民が言いたくなるようなフレーズじゃないと広がらないし、知ってもらえない。暮らしを大事にしますよ、仕事を大事にしますよ、食を大事にしますよ、交流都市を目指しますよ、として包括して豊かな暮らしのほうが言いたいと思う。4つだけだとバランスが悪いから真ん中に豊かな暮らしとしたほうがいいのではというのがあくまでも僕の意見。

あと、「工芸運動」を「文化運動」に変えたとおかしくなりますか？

【委員】

せっかく伝統工芸事業をたくさんやっている。それは市としてやっているわけで、わざわざ特化して条例まで作ってやっているのに、それを文化とってしまうのはなんとなくもったいない。文化はすごく意味が広いので、せっかくなら高松は工芸があるんだよって。文化とするとスポーツも文化なので。そこは特化したい。

【委員】

「観光」も、もうちょっと何か出てきてほしい。今の流れで言うと、「交流」の中に観光が入っていると思うが、大きな題目でなくても小さな文言だけでも入れば。

【会長】

皆さん第1回を思い出してください。皆さんの仕事に結び付けてプラスになることは発言してほしい。

【委員】

農業が食だけに入っているのが違和感。農業は機械とか衣類とか高校生とも関わっている。農業もあえて食だけにいれず、色んなものにくっつけていけばいい。

【会長】

どういふふうにするかですね。この図を通してそれぞれが関わる、関わりあうってのがいいんじゃないでしょうか。

【委員】

生活とか移住とかその部分だと、やっぱり海から山までのところがすごく重要なのかなって思って、「生活」の中に農業が入るのかとと思っていた。こんなの都市の中で農業が近いのは珍しいなと思う。農業体験のお仕事をさせていただいてるんですけど、まちがある中で農業体験ができたり、逆に作られている方が近くにいてそれをお店で食べることができるのはすごくいいこと。なので、子どもと農業とそこの生活の農業が近いというのは有りだと思います。

さっき私も島って思ったんですけど、海から山、島それが結構大事、それが全部あるってなかなかないと思う。そこが出発点となって交通も大事。飛行機も飛んでいけば、船の出発点でもある。

【市職員U40】

違和感が取れないというのが正直なところ。そこは極端なところ農業でもかまわない。農業というくくりがあってもかまわないのでは。工芸をバックグラウンドに持つ人間として、特出しすることがどうなのかなと。わざわざ焦点を当てて、引っ張り出してきている感じがある。3つぐらいのがまとめやすいのではというイメージを持って、それこそ数字に意味があるんだという話だったら、海とまちと山があるっていう、その3つの高松市を構成しているものがありますよっていう意味で3つでもいいのかな。高松市って駅から40分で山に行って、駅から40分で島に渡りきるんですよ。1時間の中で全部があるってそんなところそうそうない。

なぜ工芸なのか腑に落ちないところがあるのと、祝祭という言葉は聴きなれないので祭に変えましょうという流れの中で、工芸運動という新たな言葉が生まれている。思いを広げるものにしたいとは思いますが、本当に皆さん工芸でいいですか？

【市職員U40】

今の話で、工芸を他の3つの話に合わせてしまうと、その奥にある豊かな暮らしが見えづらくなるのかなと思う。豊かな暮らしを表現する上で、その4つという枠組みは減らさないでいいのでは。

【会長】

今、ちょっと思ったけど、「伝統と未来へつながるしごと」とか。働かないとどうしようもない。結局、移住政策もそうなんです。移住してくる人を呼び戻そうとしても、若い人たちが帰ってきてても仕事がない。そうしたら伝統ある仕事・未来へつながる仕事の中に例えば伝統工芸もそうだし、これからもっとイノベティブな仕事もそうだし、就労支援もそうだし、担い手事業だとかにつながるかなあとと思います。その中に当然、伝統工芸とか当然内包されるんですけど、さきほどの違和感とか豊かな暮らしで推していくのであれば、いったんお仕事という広い枠にして、その中の分けの中で伝統工芸だったり、企業誘致も入ってくるのかもしれないし、そういうものを織り込んでいくほうがすっきりするのかな。

【委員】

仕事は豊かな暮らしの中に入れられないかな。高松市が何を重んじるのであれば、例えば伝統の中に玉藻城・栗林公園があって、そこには工芸がありますよ。だから「伝統」というくくりにする。

【会長】

「伝統と未来」にしたい。僕がさっき書いたときに仕事は豊かな暮らしの中に入れたんですよ。なぜならさっきの話で言うと自分の領域に近いから。基本的に仕事をしてない人は暮らしていけないから。「食」というのは仕事につながるかなあと。

【市職員U40】

豊かな暮らしが全体を囲うものなのか、中心にあるものなのか、この4つの中のどれかなのかどこにでも位置づけられてしまう。今は中心で行きたいという話でいいですよ。その4つの全体をくくって豊かな暮らしとするのはおかしい？重なって重なって、豊かな暮らしとなったほうがいいんだったら今の話でいい。

逆に言ったら仕事も入れた豊かな暮らしが真ん中でもいいでしょうか？一つ伝統と未来につながる仕事という括りは色んなものがそこに突っ込める。現在のビジョンの中で、企業誘致というものはどこにも引っかからないものとして、最後に含まれている。仕事というキーワードが入ることでそこが救われるのは、柱としてすっきりするのか。仕事をはずすのは僕もつたいないなと。

【会長】

さっき僕が書いたものの中に、言い方を変えると入れなければならないものがあります。仕事を抜くと机上の空論になる。人が生活をしていく中で、心地よいものとか、食べるものとか、次の世代っていう中で仕事っていうものがある。また仕事が担保される地域というのは魅力的な地域と言い換えられる。若い人に残ってくれと言わなくても残っていくし。素晴らしい自然があるから人が残り続けるっていうのもうないのは分かっているんで、そういう意味では綺麗ごとだけではないというところを表現したいと思っている。今の議論の豊かな暮らしの中に、仕事とするのか、ピックアップしている工芸とするのか、工芸を仕事に変えて内包するのか。

【委員】

仕事がそこにあるなら、「教育」もあるべきでそうなると食育になる。食育だけがそこにあるのはおかしい。

【会長】

言葉はまた入れ替える予定です。

僕が今一番心を砕いているのは、工芸をどの位置にするのか。工芸は推したい。工芸の推し方を4つの大枠で推していくのか、仕事という中に内包した中で推していくのか、というところはしっかり話したい。なぜかというのと、この中で「祝祭」とか「国際」は外していいといったけど、「生活工芸」に関してはそういった話は一切出てきていない。こういう中の議論の中で、「工芸」というものに対して突き詰めていけば違和感があるかもしれない。ただその違和感っていうのは、極端な話、日本の社会の中で違和感があるかもしれない。高松っていうのを表現して、こういうところを目指すんだっていうのはそういう違和感はあるかもしれない。そういう捉え方もでき

る。

【市職員U40】

その意味でいうと、僕が工芸に違和感を感じるのは、高松に住んで数年になるがそこまで生活の中に工芸を感じていない。それは工芸が生活に溶け込んでいるからかもしれないし、それが高松市らしさと工芸がイコールになっていないからだと思う。芸術がどれだけみんなの中に溶け込んでいるか分からないが、表向きはイベントが開かれている形を持って、芸術が存在していると思う。工芸が遠いところの話をしているんじゃないかなと思います。

【会長】

そういう意味では、高松の人の中では工芸って言葉は耳障りなく入ってるんですよ。工芸高校という存在が、日本中どこにでもあるかというとないわけですよ。今、育てている子どもたちも芸術士の派遣をほとんど受けていて、そうやって慣れ親しんでいる中で言うと有りかなと思います。

【委員】

工芸はこのままあったほうがいい。生活に溶け込んでいるのはすごくあると思う。それについて2つあって、1つは国分寺は普通なら田園風景なのに松がいっぱい埋まってるんですよ。そこで仕事をされてる方がいて、たまに外国の方もいて。そういう意味で生活の中ですごく落とし込まれている。

2つ目が、会長がおっしゃっていたように高松工芸高校。高校生が漆を扱うなんて信じられない。工芸高校出身の方と話すとも本物の漆は良いという話が出る。ここで生活して大きくなるということはそういうことなんだろうなと。あと派生すると、仕事として盆栽の作っているところに行くことは、担い手・後継が出来ていくし、これが子どもの教育に繋がっていくのかなと思う。それが私の生まれ育ったまちで出来たかという絶対できない。あと、伝統工芸士さんと話が出来るとか聞いたことがない。作っている人が見えるっていうのはいい。すごく生活に溶け込んでいって、その方たちが小学校などに関わりながら工芸品を作っていくのは今までになかった世界。そういう意味で生活が豊かだなと。

【委員】

工芸に違和感があるならものづくりに変えたらどうか。条例も、ものづくり条例なので。もの、というのは工芸だとか産業だとかに限定しない。

【市職員U40】

全部を包み込んでいこうとしてる中で工芸に違和感を感じてはいるけれども、逆にこういったものはどこにも当てはめられる。高松市でなくてもかまわない。その中で、工芸があるからこそ、違和感があるからこそ、高松市にしかないんだと言われれば、工芸が出てくる価値は十二分にある。

【会長】

僕は大学院地域マネジメント研究院に行っていて、その中で「UDON」という映画の話が面白かったんですけど、香川の人はずどんというものを当たり前と感じすぎ

ていて評価をしていなかった。県外の人がうどんというものにフォーカスしていったときに、香川の人たちがうどんというものは誇らしいものなんだとなったときに、「UDON」という映画が生まれてうどんがブームになっていく。それに近い感じがする。気付いていないけどもいいものが有るとしたら、盆栽とか、こういう工芸品とか島々とか。その可能性があるものに僕ら若い世代が賭けて載せたというのはいんじゃないかな？

今、盆栽は農業なのかと聞いていたときに、農業的でも有るし、商業的などところにも関わる。それは重なっているところに当てはめれば。

【市職員U40】

対外的に高松をアピールしたときに何が出るかという、盆栽も出るし、庵治石も出るし、漆もだし、高松の外の人に何をアピールするのかとなったときに、アイデンティティ的なものがあるのかな。だからそれは工芸でいいと思う。

【委員】

逆に言えば、それが無いのは創造都市になりえない。

【会長】

シビックプライドでいうと、何に対してプライドを感じるのかというのは大事な論点。

【市職員U40】

子育てしやすいまちだとアピールできる。工芸は工芸で、こういう産業があるということができる。

【会長】

わりと上手く出来たのではないかな。細かい文言はまた入れます。教育だとか海のことだとか庵治石、盆栽も。可能性があるものは織り込んで言ったら面白くなるので。

【委員】

豊かな暮らしの外側にもう一個円があるべきなのかな。豊かな暮らしを全般的に発信するために、食にも工芸にも子どもにも移住とか、住まいとか仕事というのはそういうものな気がしますね。あと工芸というワードがあったほうが面白い。アイデンティティを感じやすいものであって、工芸とか食とか子どもという3つは自分たちが自信を持って高松の良いものだとして明確になってくるので、ものづくりよりはエッジが立って明確に言えるワードとしては収まっている。全体的に上手く収まっている。

【会長】

表現の仕方は工夫が要るけど、全部が関わりあって豊かな暮らしを作る創造都市高松。

【委員】

住まいだと限定されるので環境はどうか？全体を示すものだったら。

【委員】

住まいは高松らしさ？豊かな暮らしに入っている。

【会長】

時間が過ぎてしまったんですけど、今日はここまで。

図はこのままで行きます。さっきの議論を事務局と僕と副会長とでこの図を文言だけにしたらどうなるのかって言うのを、相談させていただきます。で、皆さんにまた見ていただいて、そこでまた修正します。ワードの追加とか色の変更とか。いいでしょうか？

(拍手)

【会長】

今日やりたかった議題2のプロジェクトリーダーは一旦持ち帰らせてください。ちょっとイメージしていただきたいのはそれぞれの専門性があると思うので、出している事業でスポーツのパラ陸上のことといたら、外せない委員もいるので、内々にイニシアティブをとっていただきたい人にはこちらからアプローチはさせていただきます。逆に、ここに関わりたいとかいうのがあれば、事務局なり私なり副会長なりに連絡を下さい。長くなってしまいましたが、これで今年度第1回の会を終わりたいと思います。

(拍手)

【事務局】

皆さん本当にお疲れ様でした。なかなか難しい議論でしたが、非常に上手くいのが出来て、またこれを各論の軸としてまたまとめて生きたいと思います。どうもありがとうございました。

それでは以上を持ちまして第4回高松市創造都市懇談会を閉会したいと思います。本日は大変ありがとうございました。